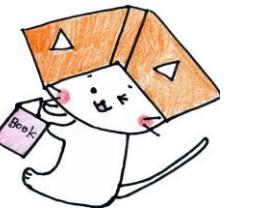




やよい図書館



フレーズ&センテンス

『アースダイバー』 中沢新一/著 講談社

「トウキヨウはまるでメリーゴーランドのような都市だ」著者のフランスの友人がつぶやいた言葉だそうです。著者の中沢新一（思想家・人類学者）が、「アースダイビングマップ」と共に東京を散策する本です。耳慣れないその地図は、縄文時代の東京周辺の地形を現代の地図と重ね、洪積層と沖積層に分けたものです。東京の重要なスポットのほとんどが、縄文時代には墓地など「死」に関わる土地だった場所にあるというのです。縄文時代には東京湾が内陸まで入り込んでおり、その考察はとても興味深い。自分の好きな場所がどんな過去を持っていたのか、読みながら散歩してみるのも楽しそう！

今月の1冊

『ドミノ』 恩田陸/著 角川書店

「こんな作品もあるのか！」と、ファンタジー、ホラー、ミステリー、学園小説など多彩なジャンルを手がける著者の新たな一面を垣間見ることのできるこの小説。なんと主人公は27人と1匹！ 2つの紙袋に入れ違ってしまうことから始まり、次々に場面が切り替わりながら登場人物の日常が描かれます。最後には日本中に知れ渡る事件が勃発、全員が東京駅に集合する怒濤の展開はまさにドミノのよう。登場人物が分からなくなりそう…と思った方も、はじめに全員の紹介がありまますのでご心配なく。ひとりの登場人物の話だけ追って読んでも充分楽しめる1冊です。

Cinema library 第2回 ティファニーで朝食を

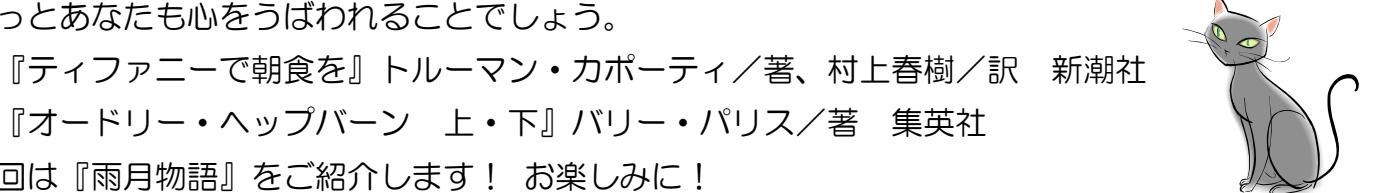
映画化された作品を紹介していくこちらのコラム。第2回目はオードリー・ヘップバーンの映画でも知られる『ティファニーで朝食を』をご紹介します。

引っ越し先のアパートで、主人公の僕は郵便受けの名札入れに「ミス・ホリデー・ゴライトリー、トラヴェリング（旅行中）」と書かれた奇妙なカードを見つけます。どうやら下の階に住んでいるらしいそのカードの持ち主は、たくさんの男性から「ホリー」と呼ばれ、憧れと愛情を一身に集めながらも、誰にもしばられることなく自由に生きる女性でした。映画では、僕とホリーのラブストーリーとして描かれ、ラストは二人が恋人同士になってハッピーエンドを迎えます。しかし、原作ではまったく違うラストになっていることをみなさんはご存知でしょうか？ 映画もステキですが、原作ではホリーという女性が持つ強さや潔さを、より強く感じることができます。自由奔放にふるまいながらも孤独を抱え、それでも誰かに寄りかかる事なく一人で颯爽と歩く彼女の姿に、きっとあなたも心をうばわれることでしょう。

★『ティファニーで朝食を』トルーマン・カポーティ/著、村上春樹/訳 新潮社

★『オードリー・ヘップバーン 上・下』バリー・パリス/著 集英社

次回は『雨月物語』をご紹介します！ お楽しみに！



読書の窓

お金にまつわる本

消費税増税から早やひと月。8%での計算にはもう慣れましたか？ 今回の読書の窓では「お金にまつわる本」として、クスリと笑える本から「なるほど！」とためになる本まで、2ヶ月にわたってご紹介します。ぜひご覧ください。

Part 1 物語で楽しむ

『ヴェニスの商人』

シェイクスピア/作 岩波書店

お金にまつわる物語、といったらやはり『ヴェニスの商人』でしょう！ 金貸しであるシャイロックが借金のかたに要求したものが人肉1ポンド、ということはかなり知られています。借金をしたアントニオは、はたして自らの肉を捧げることになってしまふのでしょうか？ 恋物語としても、裁判話としても楽しめる1冊。シャイロックの人物像に注目しながらお楽しみください。

『ニッポン硬貨の謎

エラリー・クイーン最後の事件

北村薰/著 東京創元社

主人公のバイト先に現れる奇妙な男…。「五十円玉20枚を千円札に両替してくれ」と毎週やってくるその男と、世間を騒がせている連続猟奇殺人事件、その意外な関係を探偵エラリー・クイーンが鮮やかに解き明かす、痛快ミステリーです。クイーンの未発表原稿を訳したかのような独特的の文体にも注目です！

『人はお金をつかわずにいられない』

久間十義ほか/著 日本経済新聞社

消費者金融、課金ゲーム、10万円のスカラーフ、人間を硬貨と同じ単位で扱う「人間バンク」、両親の遺した遺産…。異なるかたちのお金と人が共存する様が、5人の作家の短編集を通して描かれています。「主人公の立場だったら同じことを思うだろうか？」と自問しながら読んでみると、改めてお金に対する価値観が見える気がします。自分以外の人にも感想を聞いてみたくなる作品です。

Part 2 実態にせまる

『東大を卒業して20代で考えておきたかった「生きる力」のつくお金の本』

加藤ゆり/著 マガジンハウス

20代の新社会人の方はもちろん、消費税増税をうけて、今後の将来設計を改めて見直したい方にもおすすめしたいこの本。家、保険、節約、投資、年金など、様々な観点からみた身近なお金の話を丁寧に解説しており、将来への不安を減らし、安心を得るための情報がつまっています。知っているようで知らないかった知識があるかもしれませんね。

『アメリカの高校生が読んでいる経済の教科書』

山岡道男/著 アスペクト

「経済学」と聞くと、外国人の名前や難しい単語がたくさん出てきて分かりづらい、自分には縁の無いものだと思いませんか？しかし、実は私たちが生活する上で、一番欠かせないのが経済の知識です。この本では実生活の例をたくさん使い、経済学の基本的な考え方を紹介しています。これを読めば、世の中の仕組みがよくわかりますよ。

『値段の明治大正昭和風俗史』

週刊朝日/編 朝日新聞社

さてここで問題。明治30年当時、映画館入場料はいくらだったでしょうか？ 正解は20銭。現在の一般料金が1,800円なので、約9,000分の1の値段だったのです。本書では明治から昭和まで、アンパン、豆腐、家賃、タクシーなどあらゆる物の値段の変遷を紹介しています。また紹介者も作家、俳優、落語家などなんとも豪華！ 気になった方はぜひ他シリーズもご覧ください。

来月号から隔月で、絵本講師のぐちりえさんによる新連載『親子でおうちえほんのススメ』が始まります。お子さんやお孫さんがいる方はもちろん、そうでない方も楽しめる絵本の話を楽しんでください。